

古文 識別これだけ100

解答・決め手

答えより、**決め手の一行**を覚えてください。

丸つけのしかた 答えが合っていても、**決め手が言えなければ**×にしてください。

識別は「なんとなく」で当たってしまうので、そこを見ないと力になりません。

決め手はほぼ3つ ①直前の語の活用形（未然か連用か已然か）②直後に何が来るか（体言か・句点か）③訳して通るか。

この順に見るだけで、ほとんどの識別は決まります。

「ぬ」

1	月の明かき夜、はかなく更けぬ。	完了の助動詞「ぬ」終止形	「更け」は下二段「更く」連用形。
2	我が思ふ人は来ぬらむ。	完了の助動詞「ぬ」終止形	「来（き）」は力変連用形。
3	来ぬ人を待つ宵の更けゆけば。	打消の助動詞「ず」連体形「ぬ」	「来（こ）」は力変未然形。
4	在原業平の歌、忘れぬものを。	打消の助動詞「ず」連体形「ぬ」	「忘れ」は下二段未然形（連用同形）。
5	夜深くぬれば、夢のごとし。	下二段動詞「寝（ぬ）」の已然形「ぬれ」	「ぬれ」は下二段「寝」の已然形。
6	死ぬる命の惜しからず。	ナ変動詞「死ぬ」連体形「死ぬる」	「ぬる」全体で連体形。

「ね」

7	問へど答へねば、いと怒れり。	打消の助動詞「ず」已然形「ね」	下二段「答ふ」未然形「答へ」＋打消「ず」已然形「ね」＋接続助詞「ば」（順接確定）。
8	わが袖は、人こそ知らね、乾く間もなし。	打消の助動詞「ず」已然形「ね」	「知ら」未然形＋「ね」。係助詞「こそ」の結びなので已然形。「人は知らないけれど」（百人一首・二条院讃岐）。
9	この文、はや読みね。	完了の助動詞「ぬ」命令形「ね」	「読み」連用形＋文末の「ね」＝完了の命令形。打消なら「読まね（ば）」。
10	急ぎ往ねかし。	ナ変動詞「往ぬ」命令形「往ね」	「往ね」命令形＋「かし」（念押し）。

「なり」

11	名にし負ふ都鳥にてあるなり。	断定「なり」	ラ変「あり」連体形「ある」＋断定「なり」。
12	古き友、なほ生けるなりけり。	断定「なり」連用形「なり」	四段「生く」已然形「生け」＋存続「り」連体形「る」＋断定「なり」連用形＋過去「けり」終止形。
13	月の都の人なりけり、と申す。	断定「なり」連用形	体言「人」＋「なり」連用＋「けり」終止＋引用「と」。
14	心ある人なりしが、いま見えず。	断定「なり」連用形	体言「人」＋「なり」連用＋過去「き」連体「し」＋「が」（接続助詞）。
15	嵐の音、いまだ止まずなり。	伝聞・推定「なり」	「止まず」（打消ず終止）＋「なり」。

16	奥山に、鹿ぞ鳴くなる。	伝聞・推定の助動詞「なり」連体形「なる」	終止形「鳴く」＋なり＝音を根拠にした推定（聴覚）。「ぞ」の結びで連体形「なる」。
17	帝、御殿の内におはすなり。	伝聞・推定「なり」	サ変「おはす」終止形＋伝聞推定「なり」。
18	海面、なほ平らかなり。	ナリ活用形容動詞「平らかなり」	語幹「平らか」＋「なり」。
19	心ある人にて、いとあはれなりける。	形容動詞「あはれなり」連用形＋過去「けり」連体形「ける」	「あはれなり」連用＋「ける」（こその結びの場合）。
20	嵐山の紅葉、見る人多くなりぬ。	四段動詞「成る」連用形	「多く」（形容詞連用）＋「成る」連用「なり」＋完了「ぬ」。

「に」

21	心にかかれども、口に出さず。	格助詞「に」	体言「心」＋「に」＋動詞「かかる」。
22	行く春に惜しまるる人。	格助詞「に」	「行く春」＋「に」＋「惜しまるる」（四段「惜しむ」未然＋受身「る」連体）＋「人」。
23	物のあはれを知らぬ人にもあらず。	断定の助動詞「なり」連用形「に」	連体形「知らぬ人」＋「に」＋係助詞「も」＋「あら（あり未然）」＋打消「ず」。
24	我は男にこそありけれ。	断定の助動詞「なり」連用形「に」	体言「男」＋「に」＋係助詞「こそ」＋「あり」＋過去「けり」已然形「けれ」（こその結び）。
25	雨降るに、なほ来たる人なし。	接続助詞「に」	連体形「降る」＋「に」。
26	ことば多きに、心せばし。	接続助詞「に」	連体形「多き」（形容詞「多し」ク活用連体形）＋「に」。
27	春過ぎて夏来にけり。	完了の助動詞「ぬ」連用形「に」	「来（き）」カ変連用形＋「に＋けり」。
28	雪降り出でにけり。	完了の助動詞「ぬ」連用形「に」	「降り出で」（複合動詞）連用形＋「にけり」。
29	庭の様子いとあやしげに梅の花…	形容動詞「あやしげなり」連用形語尾「に」	「あやしげ」（＝怪しげな様子）＋「に」。
30	死にたる人。	ナ変動詞「死ぬ」連用形「死に」	「死に」（ナ変連用）＋「たり」（連用形接続の存続）連体形＋体言「人」。

「る・らる」

31	我が宿の梅、知る人に折らる。	受身	他者「知る人」が動作主。
32	愚かなる振る舞ひ、人に笑はる。	受身	「人に」＝～される相手（動作主）がある→受身。「笑は」四段未然形＋る。
33	帝、その歌をいたくめでらる。	尊敬	主語が帝（高貴な人）→動作主を高める尊敬。「めで」下二段未然形＋らる。

34	大納言、いとうつくしと見 らる。	尊敬	主語が大納言。「いとうつくしと御覧になる」。
35	恥づかしくて、ものも言は れず。	可能の打消	打消「ず」を伴う「れ」＝可能。「言うこともで きない」。
36	昔のこと、ふと思ひ出でら る。	自発	心情系「思ひ出づ」。「自然と思ひ出される」。

「る・れ」

37	池の面に、月の影うつれる を見る。	完了（存続）の助動詞「り」連体形 「る」	直前の「れ」がエ段（四段「うつる」の已然形）。
38	軒端に咲ける梅の香、いと なつかし。	完了（存続）の助動詞「り」連体形 「る」	「咲け」がエ段（四段「咲く」の已然形）。

「ば」

39	鏡に色・形あらば映らじ を。	未然形＋ば（順接仮定条件）	「あら」はラ変「あり」未然形。
40	あらばあれ、なくてもあり なむ。	未然形＋ば（順接仮定条件）	「あら」はラ変未然形。「あるならあれ（あつて もよい）、なくても済むだろう」。
41	世の中を厭はば山に入れ。	未然形＋ば（順接仮定条件）	「厭は」は四段「厭ふ」未然形。
42	病重ければ起きも上がらず。	已然形＋ば（順接確定条件・原因理 由）	「重けれ」は形容詞「重し」已然形。
43	人間へばありのままに語 る。	已然形＋ば（順接確定条件・恒常条 件）	「問へ」は四段「問ふ」已然形。
44	時来れば花おのづから開 く。	已然形＋ば（順接確定条件・恒常条 件）	「来れ」はカ変已然形。「時が来ると（自然と） 花が開く」。
45	雨の降れば、え出で立た ず。	已然形＋ば（順接確定条件・原因理 由）	「降れ」は四段已然形。「雨が降るので、出発で きない」。
46	花の散るをば惜しむ。	「をば」の「ば」＝係助詞「は」 （接続助詞「ば」ではない）	「散るを＋ば」は準体法「散るの（散ること） を」＋係助詞「は」が濁音化した形。

「し」

47 月の都に住みし人にやあらむ。	過去の助動詞「き」連体形「し」	「住み」連用＋「し」＋体言「人」＋断定「に」＋係助詞「や」＋ラ変未然「あら」＋推量「む」。
48 我ぞ知る、唐土に渡りし人。	過去の助動詞「き」連体形「し」	「渡り」連用＋「し」＋体言「人」。
49 思ひしことを書きとめぬ。	過去の助動詞「き」連体形「し」	「思ひ」連用形＋「し」＋体言「こと」。
50 我のみし怒り、人は笑へり。	副助詞「し」	「のみ」（限定）＋「し」（強調）。
51 我し思へば、なほ恋し。	副助詞「し」	「我し思へば」の「し」を取り除いても「我思へば」で意味は通る → 強調の副助詞。
52 行幸したまひしことあり。	①前の「し」＝サ変動詞「す」連用形 ②後の「し」＝過去の助動詞「き」連体形	「行幸し」（サ変連用）＋尊敬「たまひ」連用＋過去「き」連体「し」＋体言「こと」。
53 ありがたしと人みな申しけり。	形容詞ク活用「ありがたし」終止形	「ありがたし」（＝めったにない）終止＋引用「と」。
54 春雨降りしかど、花散らず。	過去の助動詞「き」已然形「しか」＋逆接「ど」	「降り」連用＋「しか」＋「ど」。

「なむ」

55 我が君もすこやかにおはせなむ。	願望（他者）「なむ」	「おはせ」未然＋「なむ」。
56 子もすこやかに育たなむ。	願望（他者）「なむ」	「育た」未然＋「なむ」。
57 鳥のこゑなむいとあはれなる。	係助詞「なむ」	「鳥のこゑ」＋「なむ」＋連体形「あはれなる」。
58 あはれ世の中なむかなしき。	係助詞「なむ」	「世の中」＋「なむ」＋連体「かなしき」。
59 言ひなむとすれど、声出でず。	完了「ぬ」未然＋意志「む」	「言ひ」連用＋「な」＋「む」。
60 涙の落ちなむを、人に見られじ。	完了「ぬ」未然＋推量「む」（連体形）	「落ち」連用＋「な」＋「む」を体言代用。
61 人もこそ来め、我れも往なむ。	ナ変「往ぬ」未然＋意志「む」	「往な」＋「む」。「人も来るだろうから、私も行こう」。

「な」

62	思ひ初めなば、苦しからむ。	完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」	「初め」は下二段「初む」連用形。
63	暮れなむとすれど、帰らず。	完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」	「暮れ」は下二段連用形。
64	あはれと思へ、人なしらせそ。	禁止の副詞「な」（「な～そ」の構文）	「な」＋連用形「しらせ」＋「そ」で「知らせるな」。
65	ほととぎすな鳴きそ鳴きそ。	禁止の副詞「な」（「な～そ」の構文）	「な」＋連用形「鳴き」＋「そ」で「鳴くな」。
66	あなかま、もの言ふな。	禁止の終助詞「な」	「言ふ」は四段終止形。文末で「ものを言っ てはいけない」。
67	はかなき夢を見つるな。	詠嘆の終助詞「な」	「つる」は完了「つ」連体形。

「て」

68	都を発ちて幾日になりぬらむ。	接続助詞「て」	「発ち」連用＋「て」＋形容詞「幾日」＋格助詞「に」＋動詞「なり」連用＋完了「ぬ」＋現在推量「らむ」。
69	歌一首、詠みてけり。	完了の助動詞「つ」連用形「て」	「てけり」「てき」「てむ」の「て」は完了「つ」。接続助詞の「て」と混同しない。
70	京にて生まれ、奈良にて育つ。	両方とも格助詞「にて」	場所を示す格助詞「にて」。

「で」

71	言（こと）問はで過ぎにけり。	接続助詞「で」（未然形接続・打消） ／訳：声をかけないで通り過ぎてしまった	「問は」は四段「問ふ」未然形。
72	聞かでやみにしことの悔しさよ。	接続助詞「で」（未然形接続・打消） ／訳：聞かないで終わってしまったことの悔しさよ	「聞か」は四段「聞く」未然形。
73	なかなか言はでやみにしを。	接続助詞「で」（未然形接続・打消） ／訳：かえって言わないで終わってしまったことよ	「言は」は四段「言ふ」未然形。

「が」

74	いみじき人が、また気高き人。	格助詞「が」（同格）	「いみじき人」（連体形＋人）＋「が」＋「気高き人」。
75	君が御志ありて、世に伝はる。	格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」）	「君」＋「が」＋体言「御志」。
76	木の葉散るが、なほ風吹かず。	接続助詞「が」（逆接）	「散る」連体＋「が」＋「吹かず」。

77	黒き雲の、にはかに出で来て。	主格	「黒い雲が、にわかに出てきて」。
78	都の空を、なほ恋しく思ふ。	連体修飾格（＝「～の」と訳す）	「都の空」＝すぐ下の体言「空」にかかる。
79	いと小さき鳥の、梢にゐたる。	同格	「たいそう小さい鳥で、梢に止まっている（鳥）」。

「べし」

80	我れ歌を詠むべきことを思ふ。	当然	「歌を詠むべきことを思う」（連体形）。
81	真夜中に物音、何ぞあるべき。	推量	「べき」は連体形（係助詞「ぞ」の結び）。
82	我れもまた、その道を行くべし。	意志	1人称。「私もまた、その道を行こう」。
83	川深くして、渡るべからず。	可能（の打消）	状況として不可能＝「渡ることができない」。
84	雪降れば、雪靴を履くべし。	適当・命令	「雪が降ったら、雪靴を履くのがよい／履きなさい」。

「らむ」

85	旅人は今、どこへ向かふらむ。	現在推量（または原因推量）	「どこへ」（疑問）あり。
86	いかでこの音を聞き給ふらむ。	原因推量	「いかで」＋「給ふ」（尊敬）＋「らむ」。
87	いまごろ山に響くらむ鐘の音。	婉曲	体言「鐘の音」の前。「今頃山に響いているような鐘の音」。

「けむ」

88	昔の人、いま何処へ行きけむ。	過去推量（疑問）	「何処へ」は場所疑問詞であり、原因疑問詞ではない。
89	いかにありし世にやありけむ。	過去の原因推量	「いかに」と呼応。「どのような世であったのだろうか」。

「たり」

90	我れ歌詠みたるを、人皆称ふ。	完了・存続「たり」連体形「たる」	「詠み」連用＋「たる」＋準体「を」。
91	風吹きたれば、舟漕ぎ出でぬ。	完了・存続「たり」已然形「たれ」	「吹き」連用＋「たれ」＋「ば」。
92	武士たりしが、いま俗にあり。	断定「たり」連用形＋過去「き」連体形「し」	体言「武士」＋「たり」連用＋「し」＋「が」（逆接）。
93	我れ仏徒たれば、戒律を守る。	断定「たり」已然形「たれ」	体言「仏徒」＋「たれ」＋「ば」（原因）。

「にて・とて・して」

94	ある男、宮にて仕うまつる。	格助詞「にて」（場所）	「ある男が、宮中で仕える」。
95	二人しておもしろき歌詠む。	格助詞「して」（共同）	「二人で趣のある歌を詠む」。
96	「世を捨てむ」とて山に入る。	格助詞「とて」（目的・引用的）	「『世を捨てよう』と言って山に入る」。
97	いと幼き子にてまだ物言ふべきほどならず。	断定の助動詞「なり」連用形「に」 ＋接続助詞「て」（～であって）	「とても幼い子であって、まだ物を言うべき頃でない」。

「給ふ」

98	親王（みこ）、馬に乗り給ふ。	四段活用・尊敬の補助動詞「給ふ」	主語「親王」（貴人）、終止形「給ふ」は四段。
99	「げに、見給ふるに、いとあはれなり」と言ふ。	下二段活用・謙譲の補助動詞「給ふ」	会話文の中の「給ふる」（下二段連体形）＝謙譲。下二段の「給ふ」は会話・手紙の中でしか使わない。
100	帝、御衣（おんぞ）を脱ぎて給ふ。	本動詞「給ふ」（お与えになる）	直前は「脱ぎて」で、別の動作のあと改めて「給ふ」。